

- 1 初旅や目に映るものすべて花
- 2 ふくよかに母となりけり梅の花
- 3 背中より眠りに落ちて梅香る
- 4 鶯やふはりと恋の近づきぬ
- 5 柵を挿して我が家の恐ろしく
- 6 天辺(てつぺん)は春の来てゐる摩天楼
- 7 滑走路霞みて遠くなる母国
- 8 綿虫の浮かびてゐたる光かな
- 9 蠢けるものを抱きて春の泥
- 10 荒くれの海の香りの榮螺かな
- 11 蝶通りあるかなきかの風動く
- 12 次々と出ては隠るる子猫かな
- 13 心音の届く近さに猫柳
- 14 爪塗つて霞引き裂くごと歩く
- 15 春雷や謂れなどなき嫉妬心
- 16 きらきらと春を編み込むレースかな
- 17 犬ふぐり愛らしく年とりたまふ
- 18 花衣敵(かたき)を討(う)ちにゆくごとく
- 19 エイプリルフルの猫の大欠伸
- 20 恋しさを募らせてゐる朧かな
- 21 しやぼん玉この世の色を吹き籠めて
- 22 風光る新種恐竜復元図
- 23 ゆつくりと会釈を返し花御堂
- 24 君のこと黙つて聞いてクローバー
- 25 暗転のあとの劇場雁帰る
- 26 吸殻の長短春の闇深く
- 27 田を植ゑて苗の高さの微風かな
- 28 愛しいと言はれなくとも山笑ふ
- 29 夕霞ひと肌といふ温度あり
- 30 風船の赤浮いてゐる霞かな
- 31 その数に鬼籍の人も柏餅
- 32 樹の下は恋人たちの五月かな
- 33 ボクサーの目はもの言はず聖五月
- 34 年下の君も子を抱くさくらんぼ
- 35 空落ちて来さうな梅雨に入りにつけり
- 36 六月は真水の色のみならん
- 37 本の山崩れて夏の雲白く
- 38 更衣一間に色を溢れさす
- 39 田園は白鷺の影置くところ
- 40 夏空を引き寄せてゆくロープウエー
- 41 蹴り上げて夏足袋の白輝かす
- 42 脱ぎてより一日の汗の重たさよ
- 43 濃き白といふ白のあり雲の峰
- 44 這ひ這ひの向つてゆける雲の峰
- 45 忽ちに王手となりて青簾
- 46 ほうたるや逢へば見つめてをりし頃
- 47 一夜して羽蟻の置いてゆきしもの
- 48 青葉木菟灰白く月残りゐて
- 49 家系図に女てふ文字天瓜粉
- 50 滝落ちてあたかも音のない世界

- 51 鉄線花どなたが何と云おうとも
52 かはほりの世界を逆に見てゐる目
53 水を打つ己を叱咤するごとく
54 花氷面と向つて母娘
55 かたくなに拒みゐるもの黒日傘
56 浴衣の子どつと乗り込み発車せる
57 早回ししてゐるごとく蟻の道
58 甲冑を纏ふつもりサングラス
59 汗を吸ひ涙を吸ひし曇かな
60 冷蔵庫中は異次元かも知れず
61 睡蓮の内より光りゐるブルー
62 熱帯夜どれも狂つてゐる時計
63 漆黒のその目で我を睨め蛇
64 サングラス越しに異国の人の中
65 睡蓮のまつすぐ天を差し朝
66 憂鬱を静かに溶かし水中花
67 傷跡の静かな痛み夏惜しむ
68 鍵盤を叩いて夏を終ひけり
69 とんばうの大海原をゆくごとく
70 水澄みて水底に見えきたるもの
71 爽やかにローマ数字の壁時計
72 三房（みふさ）つつ大事に包む朱纒かな
73 松茸のけふ山下りて来しといふ
74 蓑虫の留守かも知れぬ蓑ひとつ
75 秋の田を越えて大学構内へ
- 76 石仏のひとつ傾く添水かな
77 どこまでも青空続く小鳥狩
78 野分して消えしもの残されしもの
79 嘘ひとつ吐（つ）きし唇鳥わたる
80 マネキンの睨める虚空（こくう）昼の月
81 流星や何処かで赤子泣き始む
82 曼珠沙華少女がふいに変はるとき
83 亀買はれゆくを見届け秋深む
84 秋蝶の幻だつたかも知れず
85 霜柱地球を少し持上げて
86 岩塩のほのかな紅さ冬の月
87 焚火して付かず離れずしてゐたり
88 狐火や独り言など云ふべくも
89 不機嫌も長く続かず滑子汁
90 凍てついて光は刺を持つごとく
91 瞬間を凍らせてゐる氷柱かな
92 花嫁のブーケ放たれ冬銀河
93 冬麗や壁画に神も人間も
94 掌（てのひら）に寒卵ぞくりと重し
95 したたかに眠つてゐたり竈猫
96 やはらかく煮て青葱の甘さかな
97 俵積むやうに白菜積みにつけり
98 林檎の香包みて君に届けんと
99 ホと言へばホの凍りつく寒さかな
100 郵便のひらりと届く春隣